

ジャータカ、倉田百三と宮沢賢治

平成 28 年 12 月 23 日

敏 翁

1. はじめに

前回、少し触れた 中村元監修・補註『ジャータカ全集』全 10 巻を図書館から借りて目を通しました。実は拙論『仏説大東亜戦争』は、前回の『…根源を探る』で打ち止めとしましたが未だ心に残る問題があったのです。

それは、「捨身」思想が江戸時代までは日本民族の心の深層に蓄積している事を明恵上人、北条泰時のラインで説明したつもりですが、その後昭和に至るまでもそれが続いている確たるエビデンスが欲しいと思っていたからです。

それが図らずも、上記全集第 10 巻に掲載の最終 547 話「布施太子前世物語」の訳註から大正 10 年発表の 倉田百三著 戯曲『布施太子の入山』の存在を知り、またこの説話は昭和初期、宮沢賢治にまで影響を及ぼしている事も解ったのです。

私はこの新しい発見(?)に大いに満足しつつ、この第 574 話に関わるお話をしたいと思った次第です。

2. ジャータカ全集

上記『ジャータカ全集』全 10 巻は、中村元を中心として企画は昭和 43 年頃から始まり、紆余曲折はあったが、昭和 57 年から 10 年に亘って刊行されたものです。

ジャータカは、小乗仏教とともに南に伝わったもの(パーリ語)と、大乘とともに北に伝わったもの(サンスクリット語)がありますが、特に前者は 547 話が存在しています。

それを欧米の学者として纏めた碩学がファースベル教授(1821 - 1908)です。

The Jataka, ed. by V.Fausbell, Pali Text Society London 1877 - 1897

これを底本として全訳したものがこの全集で、本邦では勿論始めての画期的なものだという事です。訳者は 19 人に上り、厳密な訳註と中村による補註がついた極めて学求的な出版物です。

ここでは、私の通読した印象を三つばかり述べる事で誠に不十分とは思いますが、ジャータカ全体の説明に代えたいと思います。

① この全集の中には、「捨身飼虎」も「施身聞偈」も見当たりません。

これらは北伝の説話の中に含まれているものなのです。

それでも「捨身飼虎」に似た説話はいくつかありますが、「施身聞偈」に対応するものは全く見当たりません。真理を得るために身を施すという思想は正しく大乘のもので、南伝小乗にはないものだからと言う事でしょう。

② この全集の中にあるもので、北伝のものにも有って漢訳を通じて本邦に伝わったものも数多く存在しています。例えば、第 523 話『アランブサー天女前世物語』があります。

本全集は各話の冒頭に要約に当たる詩節を掲げているので、この話(全 7 頁強)の冒頭詩節を示します。

523

アランプサー天女前生物語

敵しい苦行によつて得られたインシンガ仙人の威光が、サッカの遣わした美しい天女の誘惑のために失われてしまうという物語。



この物語を表した浮彫などの美術作品はインド各地に存在しています。

例えば『世界美術全集・東洋編 13・インド(1)114p、349p

この物語は、漢訳仏典例えば「仏本行集経」第 16 卷(大正蔵、3 卷 726 頁)などにあり、本邦では、能(「金春流・一角仙人」)、歌舞伎(「鳴神」として良く知られるようになっています。

- ③ 本全集を通して、②もそうですが、女性に対する不信感の表現があふれている様に思えるところがあります。

その典型として第 536 話 『クナーラ前世物語』(全 49 頁)がありますが、その冒頭の詩節を示します。

536

クナーラ前世物語

王女は、欲望のおもむくままに、五人兄弟の王子をみな夫にしてしまった。だが、やがて王子たちはかの女に愛想を尽かす。



この説話は内容も詩節が多いのですが、その一部をご覧に入れましょう。上記赤枠をクリック願います。

これを見ると、女性に対する異様なまでの不信感が見て取れます。

それだけ当時、修行にとって性の誘惑の克服が最難事であったのでしょう。

3. 第 547 話 『布施太子前世物語』(全 109 頁)

この話は、原文に忠実に訳せば「ヴェッサンタラ前世物語」とすべきだと思いますが、訳者(辛島静志)

が、この話の漢訳を元とした倉田百三による戯曲『布施太子の入山』岩波文庫 昭和2年 から借りて名付けたものです。

これも冒頭の詩節を示します。

547

布施太子前生物語⁽¹⁾

国をおわれるまで
も布施を行ないつ
づけ、ついには最
愛の妻と二児をさ
え布施するにいた
るヴェッサンタラ
太子の物語。



中村元による補註によると

『インドに於ける大叙事詩「ラーマーヤナ」のように、この物語は仏教圏の中で最も有名な物語である。

その為この物語は様々な言語で記されている。

パーリ語、サンスクリット語、漢訳、チベット語、コータン語、モンゴル語、ネパール語、シンハラ語、カンボジア語、英語、ドイツ語、日本語。』

補註では各言語について詳細な文献が記載されています。

尚、日本語は上記倉田百三による戯曲であり、この作品は大正14年2月、帝国劇場で守田勘彌らによって上演されたとの事です。

更に補註によると漢訳である

康僧会訳『六度集経』巻二「須大拏経」には、太子須大拏 (sudana) の物語がありますが主人公の名は違うが内容は極めて類似しています。

私はこれを、『大正新脩大藏経』の全テキストデータベース から探し出して、『布施太子の入山』に登場する人物の名前などを比較してみました。

結果は、国名、太子名、太子妃名、息子名、娘名が一致することを確認した。(国王名は一字違う)

これから倉田百三は、この「須大拏経」から想を得たのだと推定しています。

(ここまで調べたのは、私が始めてかもしれません?)

この説話を表わした美術はインド内に数多くあります。

最も有名なものは、サーンチー第一塔北門横梁にある浮彫でしょう。

これはウェブでも見られます。

頁の中ほどからヴェッサンタラ本生(ほんじょう 前世物語の事)が始まっています。

更に、この物語に大いに着目した人物に宮沢賢治が居ます。

宮沢賢治とこの物語の関係については、下記ウェブが詳しいようです。

『宮沢賢治の詩の世界』2014年4月24日 ヲェッサンタラ王の布施

上記赤枠をクリックすればそこに飛ぶ事が出来ます。

そこから引用します。

『様々なジャータカを読んでいたらと推測される賢治ですが、中でも特に強い関心を抱いていたと思われるのが、「ヴェッサンタラ王」という特異な人物が登場する説話です。

賢治はこの「ヴェッサンタラ・ジャータカ」の一部を、1918年（大正7年）12月の保阪嘉内あて書簡94において引用し、1923年（大正12年）頃の執筆とされる童話「学者アラムハラドの見た着物」においても引用し、1927年の日付を持つ詩「ドラビダ風」においても引用しているのです。』

『伊藤雅子氏は、1918年（大正7年）6月15日に発行された「国訳大蔵経」第十三帙に収められている「エッッサンタラ所行品」で読んだのではないかと推定しておられます。

（宮沢賢治研究 Annual Vol.14 所収「ベッサンタラ王渉典」,2004）』

この雑誌を神奈川県立図書館に赴き(雑誌は持ち出し禁止)、「ベッサンタラ王渉典」(全16頁)をコピーしました。

この始めの2頁を見られる様にします。赤枠をクリック願います。

「国訳大蔵経」初版本は国会図書館にしか有りませんが、この2頁目にある註3と註4から、上記第十三帙は、第一書房復刻版(1975年頃発行)では、第11巻に入っている事が分かり、横浜市立図書館から借り(県立図書館には有りません)この第11巻に「エッッサンタラ所行品」を見付ける事が出来ました。

この全文を私がpdfにしたものをご覧に入れたいと思います。

上記赤枠をクリック願います。

これをご覧になると分かると思いますが、簡潔な韻文で構成されていて意味の良く取れないところが多々あります。

賢治は他に英訳を読んでいたのではないかと指摘もあります。(*1)

これは、多分

Cowell,E.B "The Jataka; or, Stories of the Buddha's former births"

の第6巻 1907年発行のものだと思います。

有難いことに、これは現在はウェブから読むことが出来ます。

上記赤枠をクリック願います。

これは第6巻ですが、この246~314頁に第547話が入っています。

始め戸惑いがあると思いますが、少し弄っていれば要領が分かり到達できます。

私は、賢治が「須大拏経」を見た可能性もあると思っています。

しかしこれは相当な漢文の読解力が必要で、賢治の力は分かりませんが、私が見比べた感じではやはり賢治は、英文の方を読んだのだと思います。

しかし「ベッサンタラ王渉典」の「1 はじめに」にある賢治がベッサンタラにふれた三つの資料は、

いずれも賢治の死後発見されたもので世に知られていたものではありません。

賢治のベッサンタラから受けた影響が作品となって生前発表された傑作は「グスコブドリの伝記」だと思います。

4. 『グスコブドリの伝記』

昔読んだ方も多いたと思いますが、記憶を確かめる為にストーリーを要約します。(*2)

グスコブド리는、ききんで両親は行方不明（ブドリとネリに食糧をのこして森へいき、うえ死にしたのである）。妹のネリは人さらいにさらわれる。

ブドリはテグス工場の男に働かされる。火山の噴火でその仕事もだめになり、ブドリは森を出る。赤ひげの百姓の家で働く。

いもち病を知る。本をうんとよんで勉強する。

主人は冷害、かんばつのためたんぼを失い、ブドリは六年働いたこの家を出る。

イーハ トーブ市へいき、クーポー博士の教えをうける。

火山局につとめ、ペンネンナム老技師の指導をうける。

サンムトリ火山を爆発させる。

潮汐発電所が二百もでき、火山局は窒素肥料を空からふらせ、農村をゆたかにする。

感謝状がき、新聞にブドリのことが出、生き別れになっていた妹ネリがたずねてくる。

彼女は結婚していた。ブドリはたのしかった。ネリはやがてかわいい男の子を生んだ。

森に父の墓も作った。

ブドリ二十七歳の年、冷害がおこり凶作が予想された。火山を爆発させ炭酸ガスをふらせて地球の熱をあたたかにすれば冷害を防ぐことができる。

ブドリはただひとり、カル、ボナード島の火山を爆発させ、死ぬ。

そして多くの人びとを凶作から守った。

次に、この童話の賢治の生涯に於ける位置付けを賢治の「略年譜」（天沢退二郎編 *3）の中の中から探って見たいと思います。気が付いたところだけを抽出したものです。

1896(明治 29 年) 8 月 27 日 花巻に生る。

(中略)

1924(大正 13 年)28 歳 4 月 詩集『春と修羅』1000 部自費出版

12 月 童話集『注文の多い料理店』1000 部自費出版

(この童話集は全く売れず、殆どがゾッキ本になってしまったという事です)

(中略)

1931(昭和 6 年)35 歳 9 月 20 日 上京、直ちに発熱、28 日に帰花、自宅に病臥。

11 月 3 日、手帳に「雨ニモマケズ」を記す。

この年、凶作。

1932(昭和 7 年)36 歳 3 月、『児童文学』第 2 回に「グスコブドリの伝記」

を発表。挿絵は棟方志功。

1933(昭和 8 年)37 歳 9 月 21 日 死去。

賢治の問題認識は、冷害・飢饉に苦しむ東北農民の救済、その為の科学技術の振興と教育・訓練が主だったと思うのですが、ヴェッサンタラ本生から強いインパクトを受け、やがてそれが賢治の血肉となり、根本的解決のためには捨身的献身が必要との認識も強まったのでは無いかと思います。

そして、それまで書き溜めていたものの中から、自分の死期を自覚しつつ、最も訴えたいものとして「グスコブドリの伝記」を発表したのだと想像するのです。

思うに、ヴェッサンタラ本生は妻子を布施するという最も困難と思われる布施ではありますが、まだ小乗の匂いの強いものです。

賢治はそのレベルを超えて、大義(ここでは東北農民の救済)の為の捨身を、文学作品として表現に成功したのです。

これは日本文学としては初めての画期的出来事かも知れません。

この後、安岡正篤が北一輝の生涯を大義(ここでは日本体制の革命的変革)の為の捨身と捉え、その流れの中に私の「伝説大東亜戦争」(ここでの大義は東亜の解放)があると認識する事が出来そうに思えてきました。

5. おわりに

本稿を纏めながら次のような事を空想していました。

宮沢賢治は、良い時に死んだのではないか という事です。

戦時中まで生きていたら、東亜の解放をテーマにした作品を書いたかも知れません。

東北農民の惨状に想いを致す賢治なら、東亜の虐げられた民衆の救済に想いが及ぶのは当然の様にも思えるからです。

そして、こうなると戦後は左翼を中心とする連中に袋たたきになった事が予想されます。

しかし、また戦後暫くまで生き延びたとして、左翼風も収まってきたとき、

賢治は、「伝説大東亜戦争」的な童話を作っていたかもしれないと思ったりもするのです。

そういう賢治に会いたいと思うのは私だけでしょうか。

註

*1 伊藤雅子「ベッサンタラ王渉典」によると

須田浅一郎「宮沢賢治の仏教(二) 賢治研究 57号(1992)にその書名も挙げているという。

この「賢治研究」は県立、市立いずれの図書館にも見当たらなかった。

*2 宮沢賢治童話名作集3 岩崎書店 1965 にある堀尾青史による解説より抽出。

*3 『ユリイカ』臨時増刊 第9巻第10号 総特集*宮沢賢治 1977年10月

完